

〈論文〉

〈記憶の伝承〉は可能か？(Ⅱ)～想起する身体について

松 島 恵 介

1. 前稿(Ⅰ)の要約および補遺と、
その批判的・発展的継承の可能性

前稿(Ⅰ)の内容を踏まえつつ、それを発展させていくのが本稿(Ⅱ)の役割である。

しかしながら、ここには半年あまりの時間経過があり、当然ながら筆者の思考の進行や逡巡といったものが生じているわけであるから、それは単なる順行的発展ではなく、ある種の自己修正や自己批判等を含んだものであることを先ずはご了承願いたい。

以下では、前稿(Ⅰ)に修正を加えつつ再構成しながら、それを発展的に継承していく可能性を先ず問うこととしたい。

1-1. 過去の知覚の〈不在〉と、〈不在物のリアリティ〉

まず、前稿(Ⅰ)で確認されたのは、想起は過去の知覚の再現ではない、ということであった。しかしながら、想起主体においては、何らかの「当時の『ありありとした』感じ」が生じることには経験的事実としてある。「知覚それ自体が不在であるにもかかわらず、生々しい」という、一見、論理的には矛盾するように見えるこの有り様を、われわれはさしあたり、〈不在物のリアリティ〉と名付けることにした。

本稿の一連のシリーズを貫く主題は、この〈不在物のリアリティ〉をめぐる、それをどのように定義すべきか、そして、それが実感し得る現実性をもって存在するとするならば、それは第三者たる他者に伝達可能であるのか、という点である。いうまでもなく、この両者はともに重要であり、前者と後者は相互に深く関係し切り離すこと

は困難であろうが、われわれとしては、まずはこの〈不在物のリアリティ〉という新たな概念の矛盾を解きほぐす作業から始めなければならない。

1-1-1. 〈不在物のリアリティ〉と「身体の持続」

さて、この〈不在物のリアリティ〉を喚起するものは、そもそも何であるか。

前稿(Ⅰ)では、この議論をすすめる軸として、記憶し想起する主体の、「身体」に着目した。

かつての出来事はすでに「不在」ではあるけれども、それを経験した身体はある種の実在物として過去から現在へと持続している。すなわち想起主体においては、過去から持続する身体を用い、不在にアクセスすべく想起を行うのである。こうしたとらえ方をすることによって、想起においては当時の出来事それ自体は「不在」であるもののそれを経験した身体の在りようは蘇り得る、と考えることができる⁽¹⁾。

こうした議論によって、〈不在〉は単なる「無」よりも一歩前進した何ものである、という微かな進歩をみることができよう。そして、先の〈不在物のリアリティ〉という概念における矛盾は僅かながらも軽減されることになると思われる。すなわち、かつての出来事に向かっていった自らの身体の在りようが再び現れることによって、想起主体は、その不在の出来事に会った際のリアリティをも復興させ得る、という論のたて方である。

ただし身体という漠然とした概念は同時に危うさもはらんでいる。この概念を採り入れることで、ややもすると本稿が巧妙に回避してきた疑念が生じよう。すなわち、当時の身体の有り様は再現されたとしても、当時の知覚そのものは再

現されないという前提があったはずであり、ここには議論の混乱があるのではないか、という問題である。この問題について前稿（Ⅰ）では、〈身体の構え〉という概念の導入を試みた。

知覚と〈身体の構え〉をどこまで厳密に峻別するかは、本稿（Ⅱ）において解されるべき課題であるが、ここではさしあたり前稿（Ⅰ）において〈身体の構え〉の定義に向けてそれをどのように例示しつつ構築していったかを確認しておこう。

〈身体の構え〉とは、先述した、想起において蘇り得る「身体のありよう」を精緻化した概念であり、先達の高木（1996）の議論を念頭に置きつつ導入されたものであった。

前稿（Ⅰ）での考え方をごく簡単に要約すると、〈身体の構え〉とは、出来事に対する当事者固有の身体に向かい方や指向性などのスタイルや構造を一括して呼称するものであった。むろん、この段階では未だ抽象度が高く、概念としてのブレをも孕むものであるため、前稿（Ⅰ）においては、具体的な事例や実験、経験的事実等を列挙しつつ、その内容を可能な範囲でつまびらかにしていった。

まずは、「自転車の乗り方」という道具使用にかんする〈身体の構え〉の大規模な変化による劇的な忘却の事例、また、認知科学で「空書」と呼ばれる、漢字表記の想起といった認知的な課題についても〈身体の構え〉が重要なはたらきを持つことを論じた。さらに、ホロコーストの経験といった、言語化や理解に困難を孕み、かつ想定外の異常事態に関する想起を具体的事例として挙げながら、〈身体の構え〉概念の妥当性を検証しつつ、その可能性を模索した。

むろん、こうした過程を経ても、未だこの概念は曖昧でありブレを孕むとする謗りは避けられないであろう。したがって本稿（Ⅱ）では、この概念を洗練されたものに鍛え上げることを第一目標としつつ、その妥当性および有効性をさらに追求することとしたい。

具体的には、不在の出来事の輪郭をある程度まで露わにすることが可能なものとして定位することを試みる予定である。

1-2. 〈不在物のリアリティ〉の伝達は可能か

－反復と〈身体の構え〉の伝播をめぐる－
さて、前稿（Ⅰ）で提起されたもうひとつの議論は、想起において生じ得る〈不在物のリアリティ〉を他者にどの程度伝達できるか、あるいは、できないのか、という深刻な問題であった。

先述したように、現段階においては、想起の具体的なありようの解明が未だ発展途上であり、それゆえ、こうしたアクチュアルな問題へと踏み込んでゆくことは拙速でやや危険をはらむと思われる向きもあろう。しかしながら、本稿のそもそもの主題である「他者への記憶の伝承」は、戦争体験の証言者が漸減するという（戦後70年を迎えようとする現在、戦争体験の記憶継承の在り方を巡る議論は喧しい）喫緊の問題であるし、またこの20年のあいだに我が国で生じた二つの大震災（阪神淡路・東日本）をどのように語り継いでいくか、という問題に我々が現に直面している事実を考慮するならば、やや荒削りながらもこの可能性を素描することは許されるであろう。

さて、前稿（Ⅰ）において、この「他者への記憶の継承」の可能性を少しでもこじ開けようとする鍵概念は、「反復」であった。

この反復は、主として想起を聴くことの反復であった⁽²⁾。この問題が議論されたきっかけは、戦争体験や大災害などの想起を聴く際の、聴き手側の〈身体の構え〉が、語り手側のそれと大きく異なるケースであった。こうした際には、初めて聴くに当たってその内容を「うまく理解できない」ことが多い。しかしながら、前稿（Ⅰ）においては、何度も反復して想起を聴き続けることにより、聴き手の〈身体の構え〉が語り手に近似していき、そこから聴き手においてある種の共感的理解を導くような道筋が具体的事例の紹介とともに検討され、その妥当性と一般化可能性が模索された。

尚、この「共感的理解」とは、いわゆる〈認知的な理解〉ではなく、〈身体的な理解〉とでも呼べるような「分かり方」のことであった。すなわち、ここでも再び〈身体の構え〉の伝播による近似がもたらす、〈不在物のリアリティ〉の身体的実感が生じているわけである。

1-3. 本稿の課題

以上のように、前稿（Ⅰ）においては、いささか拙速に重要な問題をつぎつぎと議論の俎上に載せており、問題提起や概念の提唱を急いだ感がある。

先述したように、本稿においては〈不在物のリアリティ〉をめぐる、その概念をより洗練されたものにする再検討の作業を行いたい。

もう一方の、他者への記憶の継承問題をめぐる議論については、本稿（Ⅱ）のボリューム的な制約のなかにはおそらく収まらないであろう。それは、次号（Ⅲ）以降の課題として保留（熟成）することになるはずである。

2. 〈不在物のリアリティ〉をめぐる再検討

前稿（Ⅰ）における暫定的な結論のひとつは、「想起において、かつての知覚が再び現れることはない」、ということであった。われわれの常識を覆すようなこの言及について、果たしてすべての知覚においても断言すべきか否かについては、じつのところ未だ揺れる部分が残っている。

この言及は、大森（1992）の論を詳細に検討するなかで生じてきたものであるが、この検討は「痛み」という限定された知覚においてなされたものであって、かならずしも他の知覚には当てはまらない可能性が残る点は前稿においても指摘したとおりである。

前稿ではその一方でまた、想起の際にわれわれがごく一般的に感じ得る「ありありとした感じ」についても、それを「知覚の再現」として認めるのではなく、「疑似知覚」として捉える議論を行ったわけだが、それについてもジェームズ＝ランゲ説を間接的に援用した議論の流れの果てに出てきた仮説的な結論であって、決定的なものではないとして留保しておいた。

本稿において、これに続く議論をより具体的な、且つ説得的なものに洗練させることが可能であるかはいささか心もとないが、前稿とはやや異なるアプローチをとることによって、少しばかりはそれに近づくことが出来るかもしれない。試みてみよう。

2-1. 痛みと味覚－知覚をめぐる身体ダイナミクス

まずは大森（1992）の主張を確認しておこう。

「昨日の歯痛を今想起するとき、たとえばすかにでも歯が痛むだろうか。」

「痛みがあるとすれば、それは『誤解』であり『錯覚』である。」

「想起とともに新たに痛みなどが喚起されることはありうるが、それは『パブロフの想像知覚』であって想起ではない。」

「想起とは過去の知覚・行動経験が知覚的に再生されたり再現したりすることではない。」

確かに大森の言う通り、痛みの想起には痛みは伴わないし、それは「弱い知覚」として蘇るわけではない。このことは経験的事実としてわれわれにおいても確認できよう。痛みの想起時には鎮痛薬が不要なのは明らかである。ちなみに「パブロフの想像知覚」という、彼特有の分かりにくい術語については、前稿（Ⅰ）において疑似知覚として仔細に検討したのでここでは改めて行わない。

さて、ここで、「痛覚」とはまた別の、我々としても実感として判断に迷う可能性のある、曖昧な例を考えてみよう。「味覚」の想起である。

ここでも日常におけるごく身近な事例をベースに検討していこう。「わたしが先日食べた『炊き込みご飯の味』をいま想起するとき、口内にはその味がそのまま蘇るだろうか」。

この事例では、先ほどと異なり、即座につぎのような反論が生じるかもしれない－過去の味はたしかに蘇り、再現されうるだろう。それは想像知覚といった類の“疑似的な知覚”などではなく、過去の知覚の再現といってよいだろう。たとえば多くの料理人は、かつての幾多の「味の記憶」が明確にあり、かつ、それが当人においてかなり正確に再現されるからこそ、微妙な味の表現が可能なのであるし、また、「いつもの味」を毎日提供できるのも、味覚の記憶と再現がそれを支えてい

るからではないか、と。

たしかに毎日のように料理を行う人々（主婦・主夫も含め）は、味見をしながら昨日と「同じ味」、そして微妙に「違う」味をも意図的に作り出すことが出来るように見える。前作の炊き込みご飯の味を想起しつつ、それよりも濃い／薄い、もしくは同じ味を自在に作りあげる料理人においては、味の忠実な知覚が舌の上に再現できているように思える。

2-1-1. 痛覚にたいする〈身体反応〉、味覚にたいする〈身体運動〉

しかし、「想起において蘇ることのない」痛覚と、「蘇るように見える」味覚とのあいだには、なにか本質的な差異があるのだろうか。それらはともに、ある対象物の知覚ということにおいては等価であるはずだ。

ここになんらかの差異があるとすれば、その知覚をめぐる身体反応の大きさの違いであろうか。この漠然とした直観を、以下、具体的に「痛覚」と「味覚」に対するそれぞれの身体反応のダイナミクスを比較しながら考察を深めていくことにしよう。

まず、痛みを巡る身体反応について、味覚をめぐるそれと比較しながら、その特徴を指摘しておきたい。

痛み、とりわけ前稿（Ⅰ）で採りあげたような「歯痛」の知覚の場合、味覚に比して身体はおおむね受動的にそれを感じており（むろん、現実にはその痛みを能動的に探索するような活動も時にあろうが）、さらに、その対象をめぐるなされる身体の諸反応のアクション自体は味覚に比してやや小さいものと捉えられよう。もちろん、痛みによって顔は歪められ、時には涙も出てくることもあろうが、それは痛みに隣接した身体部位の直接的な反応ではなく、歯痛の生じている口内の現場とはやや遠い、顔の表面における表情と呼ばれる領域での反応である。また、歯痛が「どこに」生じているか、という点についても主体はそれをあいまいにしか定位できないことが多い。「左の上奥歯、それも奥から三番目の歯の歯茎の、深さ1cmまでの領域が痛い」というような具体

的な説明を歯医者に対して出来るケースは少ないだろう。痛みは、主体がその身体部位を限定的に叙述しようとすればするほど、逆に曖昧に抽象化していくことが多いのだと思われる³⁾。

随分とまどろっこしい書き方になってしまった。一方の味覚に対処する身体の動きをみていくことで、これらは対照的なあり方を示すだろう。

さて、こうした痛さの知覚反応に対して、味の知覚においては、身体はかなり能動的に知覚対象（飲食物）をとらえ、さらに、それを直接に取り囲み、そして積極的に対象が独自にもつ特性を引き出そうと動き続けるであろう。

先の炊き込みご飯を例にとれば、その複雑で繊細な（?!）味を引き出すために、舌はあたかも触手のごとく対象にまわりつきながらリーチングし、唾液はたえず流量を調整しながら対象を溶解しようとする。また、そうした動きと運動しながら、上下の歯は噛み切ったり押しつぶしたりを絶えず行いつつ、食物内部へ浸透した味わいを少しずつ引き出し、上あごもまた同様に対象物に濃厚に接触しつつ、圧縮し、嚥下の際には鼻腔を含む咽喉および口内全体が協調しながら食道へと送り込み、…（以下略）⁴⁾。われわれが料理に“舌鼓を打つ”際には、その「味」を捉えるための、こうしたダイナミックな動きが絶えず行われているといつてよいだろう。われわれが聞くことのできる舌鼓の音は、その現れのごく一端に過ぎない。

こうした身体反応は、痛みに対する身体のありようとは対照的であるといえるだろう。味に対するそれは〈身体反応〉というよりも、より能動的でダイナミックなあり方として、むしろ〈身体運動〉と呼んでよいようにも思われる。但し慎重を期して、もう少し事例を検討してみしてから判断することとしよう。

では対象物が固体ではなく、液体の場合はどうであろうか。たとえば、ソムリエがワインをテイステイングするときの口内の動きを例にとるならば、その口内では、たえず賑やかな動きが生じており、それらはひとときも停止することはないことが見てとれる。そこではワインに含まれている繊細で複雑な味を引き出すためにダイナミックか

つ多様な動きが常時、行われているのである——その舌はつねにその味や、滑らかさ、粘りや重さといった特質をまさぐるように目まぐるしく動き、またワインを空気に出会わせてその味の変化をみるために、唇はここでも鼻腔と連動しつつ口内に外気を送り込んだり逆に密閉したりと慌ただしく動くことになる。そのほか、上あごや内頬までもが動員され、ワインは口内のあらゆる場所を激しく、時にはゆったり移動し、鼻—口—喉の全体において味を引き出されることになる。

さて、そもそもの問題は、痛覚と味覚との違いであった。具体的には、「想起において、痛覚は再現されないようにみえるが、味覚は再現されるようにみえる」という差異をめぐって、その根拠らしきものをなんとかして見出したいというわれわれの目論見があったはずである。

ここに至って注目すべき両者の違いはやはり、〈痛覚：味覚〉の対比における、身体の〈受動性：能動性〉、その身体反応の〈単純性：複雑性〉、そしてなによりもその身体反応の〈静態性：動態性〉といった対照性である。後者、すなわち、味覚においては、身体は能動的に複雑に、かつダイナミックに（動態的に）動くのである。

そして味覚をめぐって身体がこのような反応を行うのであれば、それはもはや、〈身体反応〉ではなく、やはり〈身体運動〉と呼んで差し支えないだろう。

そして、対象へと向かうわれわれのこうした協調的身体運動は、複雑でありながらも、しばしば、そのまとまりにおいて記憶され且つ再現される点に留意しておきたい。前稿（Ⅰ）において示した、自転車という対象に向かう身体運動は、いうまでもなく身体各部位の協調のもとに成し遂げられる。その協調のありかた（まとまり）が身体において記憶されているかぎり、主体は自転車に乗れることになる。他にも、箸を使う、赤子を抱っこする、服を試着する・・・われわれが対象にかかわるあらゆる身体運動にはその“まとまり”の記憶が持続しているはずである。

さて、ようやくこの段になって、われわれの抱えていた厄介な問題がすこしずつ解きはぐされ始めたかもしれない。

身体反応としての痛覚は、その当時において知覚されるものの、記憶として身体の中に留まりつづけることはない。それはその都度、反応として「痛い」のであり、想起時には「痛くない」。一方、味覚は身体反応というよりむしろ、主体が対象へと能動的に働きかける身体運動としてあり、それはある種のまとまりとして身体において持続し続ける、すなわち記憶化され「～という運動が出来る」というかたちで想起される。但し、これは必ずしも知覚の再現ではない。舌に甦るように感ずる「美味しい」味は、身体運動の再現に伴う幻影のようなものではないか。こうした仮説である。しかし、毎度のことながら、経験的事例の羅列にとどまる現段階において拙速にまとめることには慎重にならねばならない。

2-1-2. 対象の特性（アフォーダンス）を引き出す、協調的運動について

先の仮説をより確固たるものにするためには、少しばかり遠回りをしなければならない。以下、しばしお付き合い願いたい。

じつは先の、「身体各部位が協調して働き、対象の特性を引き出すように働く」という事態は、既に J. J. ギブソン（たとえば Gibson, 1950, 1966, 1979）を始祖とする生態心理学⁽⁵⁾において幾多の研究事例として言及されている事実である。

生態心理学的な身体運動研究によれば、われわれが何らかの対象に向かってある動きを仕掛けようとする際、身体各部位は好き勝手にバラバラの動きをするのではなく、その対象の特性（アフォーダンス）を引き出すようにして身体が「協調」・「協働」して動くのだという。たとえば、地面に落ちた物を拾い上げるというシンプルな動作を思い起こすだけでもよい。体の各部位は互いに協調してバランスをとりながら、うまく「しゃがんで物を拾い、また、すっきり立ち上がる」身体運動を円滑に達成していく⁽⁶⁾。いうまでもなく、その落とし物が米粒であるのか、風船であるか、漬物石であるのか、あるいは犬であるのかによって、人間側の運動は大きく変わり得る。対象の特性が変化するためである。しかしながら、その何かを拾うために、身体各部位が協調して「動き合

う」ことによってその活動が実現していることに
関しては共通する。

先の、ワインやご飯を飲食するケースにおいても、それぞれの味わい（その味覚的特性：アフォーダンス）をうまく引き出そうと、口内の動きは協調して、あるひとつの動きのまとまりを達成していたはずである。おそらく、幼児期において、炊き込みご飯やワインのような複雑で繊細な味わいが“分からない”者が多いのは、いわゆる「味覚の未発達」が唯一の原因なのではなく、口内の各部位の協調がうまく動かない為に、対象のうまみ特性をうまく引き出せない、という点が大きく影響しているのではないかな。

さて、以上のような、「ある対象に対して、その特性を引き出すようにして動く、協調した身体の在りよう」については、生態心理学的に「エコロジカルな身体性」と呼んでもよいし、あるいは、ゲシュタルト心理学的な思考法にならって、「身体運動のゲシュタルト」（ゲシュタルト：意味のある、あるいは統合された、ひとつのまとまった全体的な像）と表現できる側面も併せ持つ。

ただし、本稿では、こうした身体の在り方をも含み込んだうえで、〈身体の構え〉という概念を提唱しようとしていたのであった。

繰り返しになるが、前稿（Ⅰ）において採りあげた「自転車に乗る身体」を再び思い起こして頂きたい。自転車の「二つの輪のみで前進する」という特性に対応するように、身体各部位は互いに協調して動いていたはずである。いうまでもなく、自転車に乗れないのは、いわゆる運動神経であるとか運動能力・身体能力といった〈個別の能力〉の欠如などでは決してなく、身体各部位の協調の在り方がうまく達成されない点に原因がある。いくら優秀な身体特性を完璧に備えた者であっても、自転車に乗った経験がなければ——すなわち、自転車の特性を引き出す身体の協調のあり方を身体が記憶していなければ——人生において初めて自転車を目の前にして「いきなり」自転車に乗ることは絶対に不可能なことなのである。

2-1-3. 〈身体の構え〉の再興が〈不在物のリアリティ〉をどのように復活させるのか？

肝心の議論に少しずつ引き戻していこう。味覚の体験において記憶されるものは、身体の細部のささいな動きのひとつひとつではなく、対象物（ご飯やワイン）の特性（おいしさ）を引き出すようになされた身体運動の協調のありかた＝〈身体の構え〉であると思われる。

このように考えてくると、当初のわれわれの問題、すなわち、知覚時に記憶された〈身体の構え〉が、想起時において現れることで、そこに何らかのリアリティが出現するのではないかな、というわれわれの議論の流れの俎上にうまくのってくるように思われる。具体的に順を追って考えていこう。

まず、対象物を味わった当時になされた〈身体の構え〉が、想起時にある程度よみがえることは期待できるだろう。これは必ずしも正確なものでなくてよい。すなわち、「自転車にしばらく乗ってなかったが、10年ぶりに乗ったらすぐに漕ぎ出せた」ようなややアバウトなレベルでもよい。むしろ、昨日味わったばかりの旨い寿司やワインを食通が想起するようなケースでは、かなり原体験に忠実な〈身体の構え〉が現れ出ることになるだろう。但し言うまでもなく、これは必ずしも舌の動きなどがそのまま再現されることではない。〈身体の構え〉はそれよりも抽象度が高いものであることはこれまでに何度も確認しておいた。もちろん、昨日のご馳走を想起する際に思わず出現する「舌なめずり」のようなものは、ある種の〈身体の構え〉の具体的な動きとしての再現に近いはずではあるが。

〈身体の構え〉の出現の抽象度については個体差があるのは当然で、そのあり方はさまざまであろうが、それはやみくもに抽象であるわけではない。たとえば、それは漠然としていて明瞭なものではなくとも、他の飲食物との峻別能力はある程度具体的にそなわっているように思われる。たとえば、一般的には、たけのこメインの炊き込みご飯／鶏肉メインの炊き込みご飯／椎茸メインの炊き込みご飯を味わうことにおいては、それぞれ〈身体の構え〉はごく近似してはいるものの、味わう主体においては明確に峻別される〈構え〉となっているであろう⁷⁾。また当然ながら一流の料

理人や食通であれば、その差異の峻別は、対象の微細な差異に対応して繊細なものになっていくはずである。

さて、想起においてこのように再び現れるはずの〈身体の構え〉は、先にみたように、そもそもは対象の特性を引き出すために駆動されたものであった。先述したように、その為には身体は時として対象にまわりつき、またしっかりと寄り添おうとするだろう⁽⁸⁾。

したがって、〈身体の構え〉を復興した想起主体においては、同時に当時の〈対象の特性〉が何らかのかたちで浮かびあがってくるに違いない。ここで生じる対象の特性とは、〈身体の構え〉があるまとまりを持っていたように、特性としてのまとまりをもって現れるだろう——先の事例でいえば、「たけのこの炊き込みご飯」としてのまとまりのように。このように対象独特の特性がまとまりをもって露わになるなら、想起主体においては、ある種のリアリティをも感受することが出来るだろう。ここでいうリアリティとは、いうまでもなく、われわれのいうところの〈不在物のリアリティ〉に該当する。

ただし、ここで、注意すべきは、われわれが何度も確認したように「知覚は再現されない」というテーゼである。

重要なポイントと思われるので繰り返すが、対象への知覚そのものはやはり、大森のいうように再現はされない。しかし、対象を取り囲むように、そして対象の特性を引き出すように協調的に動いた身体のまとまり＝〈身体の構え〉は想起できる。それは対象の特性のある意味で明確に輪郭づけるのである。

おそらくはこのまとまりをもった「輪郭づけ」こそが、「対象の再現」そして「対象の〈知覚の再現〉」という誤解を生じてきたのではないだろうか。われわれはただ、〈身体の構え〉に対応する、対象の特性のまとまりの出現（それはもはや「～の味」と呼んでよいかもしれないが）を、現実の「味」の再現として錯覚してきただけではないか。

そして、このことは他のあらゆる「対象に向かう運動」に共通するものと考えてよいのではない

だろうか。あらゆる知覚は再現されないが、運動に伴う〈身体の構え〉とそれに対応する〈対象の特性のまとまり〉は再現される。それによって「知覚的」なものが錯覚される、という構図である。

2-1-4. 〈身体の構え〉と時間－未来と反復

こうした〈身体の構え〉は過去から現在という時間において持続するだけではなく、未来という時間をも先取りするプロスペクティブな側面も合わせ持つことも参考ながら付け加えておきたい。

これまで味覚について集中的にみてきたわれわれとしては、ここでもそれに関連する事例をみていこう。たとえば、俗にいう「カレー舌」（地方によっては「カレー腹」ともいわれる）のようなものである。かつて様々なカレーに向けてなされた身体の諸運動の集合＝〈身体の構え〉が、ふと何かの拍子に想起され、起動されると同時に、これからやってくるであろうカレーという未来の不在物にむかって予期的な構えをなす。

こうした事態になった際、「きょうのお昼はぜったいカレーが食べたい」「ああもうカレー以外たべたくなくなってしまった」といった展望的な予期意識が膠着化されることが多いであろう。

〈身体の構え〉はこのように展望的な未来へのベクトルをも併せ持つものであるが、むしろ、ここにおいてもやはり、知覚は再現されることはない、という事実は改めて確認しておこう。

もしここで、われわれの仮定に反して、カレーの味そのものがふたたび現れるとするならば、どのような事態になるだろうか。多くの〈カレー舌〉をかかえた人々は、それを想起し続けることである種の満足を得てしまうことになりかねない。たとえば、「カレー味」そのものを舌の上に30分間再現し続けることで、「ああ、もうカレーは十分味わった。昼飯はとんかつにしよう」と言い捨ててトンカツ屋に向かうことになるだろうが、これはわれわれの経験的事実に大きく反する言動であろう。

なお付言すれば、「カレー舌」や「カレー腹」のような〈身体の構え〉は必ずしも現代においてのみ生じたものではなく、たとえば内田百閒の

「御馳走帖」(内田, 1946)を繙くと、次のような記述に出会う——どう云ふわけだか、私は何かと云ふとアイスクリームを飲む。格別好きだと思つた覚えはない。(中略)何でもいいので、ただアイスクリームが飲みたくなる⁽⁹⁾。

終戦直後の、必ずしも食生活が豊かとはいえない時代においても、〈身体の構え〉の想起の力は、過去の対象の特性を呼び起こすばかりでなく、未来の来るべき対象へと主体を強く向かわせるような指向性をも備えていたといえよう。

ところで、われわれの経験的事実に鑑みれば、こうした〈身体の構え〉は、未来への指向をもつばかりではなく、反復の性質をも同様に持つこともあり得るだろう。たとえば、毎日朝食に同じものを食す、という事例は多く耳にするとところだ。

このこともまた、現代に限ったことではない。先の内田百閒は、必ず昼食には「そば」を食していたという逸話も残っている⁽¹⁰⁾。

以上のように、〈身体の構え〉は、過去－現在－未来という時間を跨ぐと同時に、時間のなかで反復しつつ他を拒絶する力も併せ持つこともあるのである。

2-1-5. ジェームズ＝ランゲ説の再検討へ

ところで、〈身体の構え〉がさまざまな仕方であつた〈不在物のリアリティ〉を生み出すというこれまでの議論は、前稿(Ⅰ)において採りあげた「ジェームズ＝ランゲ説」の再検討を必然的に促すであらう。

「(悲しいから泣くのではない。)泣くから悲しいのである」という例の有名なテーゼである。この、「泣く」という運動を、泣く際に伴う〈身体の構え〉と置き換えてみてはどうだろうか。

むろん、文化や人によって、泣き方はさまざまであり、単純な変換は危険である。しかし、各文化によって、そして、各人において、泣く行為は、いくつかの限られた種別に分類できよう——たとえば、我が国においては、めそめそ泣く、えんえん泣く、しくしく泣く、わーわー泣く、ぎゃーぎゃー泣く・・・など。こうした擬態語による「泣き」の種別は、われわれのいうところの〈身体の構え〉の有り様の種別との対応関係があると

考えることは出来ないだろうか。

むろん、われわれのいうところの〈身体の構え〉という概念は、何らかの対象へ向かっていた／いる身体の有様であり、先のテーゼの「泣く」は、いきなり「泣く」という行為形態として登場するのであつて、そこは異なる点として残る。

しかしながら、ある泣き方で実現された〈身体の構え〉が、逆向的に何らかの内的状態を導く、というジェームズ＝ランゲ説は、われわれのこれまでの議論とはまた異なる〈不在物のリアリティ〉を生み出すようにも思える。

むろん前稿で触れたように、それは「錯覚的なもの」に限りなく近い可能性を孕むであろうが、逆にそこに自覚的でありさえすれば、この性質を利用しながら、相同的な身体をもつわれわれの間に〈不在物のリアリティ〉を分有・共有できる可能性を見出せるかもしれない。この問題はなかなか魅力的でありつつも、手強そうである。

この議論に関しては、「身体化された認知」(embodied cognition)の近年の研究動向も参照しながら、次号以降において、「ある身体の状態が、ある心的状態を導く」可能性が議論されつつある身体心理学の知見なども援用しつつ、詳しく検討していくことにしよう。

2-2. 知覚不在のリアリティ——芸術表現をめぐる

さて、以上のような議論はかならずしも日常的な運動に限られない可能性もある。その拡がりについてもみておこう。たとえば、芸術表現に類似の経験をみることは出来ないだろうか⁽¹¹⁾。

例として、西洋近代絵画におけるゴッホなどの後期印象派の点描画(線ではなく点で表現する絵画⁽¹²⁾)を思い起こしてみよう。それは対象を写實的に・明瞭にかたどつたものではなく、彼が対象物から受け取つたその特性のみを(ある意味で)最小限に表現したものであるといえるだろう。その表現の痕跡は、単なる対象の輪郭の忠実な“なぞり”ではなく、対象の特性に対応する彼の身体運動の軌跡のひとつのあり方、すなわち〈身体の構え〉の一ヴァリエーションといえるだ

ろう。

他の芸術表現としては、身体の動きのみで、そこに不在の事物や出来事をありありと表象するパントマイムという芸術様式がある。パントマイムという、大道芸的な見世物という印象を持つ向きも多だろうが、ときに「記憶の芸術」とも呼ばれるような技芸を世界的に広めたこの領域の第一人者である、フランスのマルソー (Marcel Marceau) の演技 (とりわけ、1940 年代にドビュロー賞を受けた『無言劇』のシリーズ) を仔細に観察するならば、今のわれわれの議論にとって多くの含蓄を見出すことができる。彼の身体所作もまた、対象を明確にかたどったものではなく、微かな身体運動で、そこには不在であるはずの様々な事物の特性を「ありありと」露わにするものである。

パントマイムは、完成品としての絵画と異なり、その制作過程を具体的に露わにしてくれる。手のシンプルな動きで現出される「壁」などがよく知られるが、実際の演者の手の動きは、当然のことながら、実物の壁を触る動きとは異なる。マルソーの演技における分かりやすい例でいえば、彼が不在物である「塀」の上に肘を置くシーン⁽¹⁾では、肘は必ずしも空中のある固定点に固着してはおらず、微細に揺れている。それどころか、彼の手は、そこに屹立しているはずの塀の“内側”を平気で通過したりするのである。その通過直後に、その塀の上に肘がもたれかかるように見て取れるわけだが、ここでは、ある対象の特性を時間的なポイント各所において身体所作で表現することによって (絵画的に言えば“点描”的に動くことによって)、身体の向かう対象は、不在ながらもそこに存在に限りなく近いリアリティを獲得していくといえるだろう。

なお、マルソーは、演劇や映画の評論で知られるドイツのイエーリング (Herbert Jhering) とのやりとりにおいて次のように述べている (Jhering・Marceau, 1956)。

だいいち風なんて眼にみえないものなのですからね。私たちはそれを見えるようにしなければなりません。まともに風を受けたときのこと

を、私たちはどうやって表現しますか？ 体のバランスをとりながら、風の抵抗感をくりかえします。水の中を歩く場合だっておなじことですね。つまり人間と人間をとりまくいろんな要素とを一致させるということです。(下線は筆者による)

われわれの主題とひびき合う言及であるが、とりわけ最後の「人間と人間をとりまくいろんな要素とを一致させる」という発言に注目したい。これは先ほどから継続的に議論している、「対象を特定する情報 (特性)」と、「それを能動的に拾い上げる人間の運動」との対応関係のことであるといえよう。

先の点描絵画にしろ、このパントマイムにしろ、こうした対応関係がわれわれの前に現出したとき、ある種の強いリアリティがそこに生じることになるだろう。

そこにはもはや、われわれが検討してきたように、“対象物の知覚”は存在しないし、想起という認知作業による“知覚の復興”も必要とされないだろう。そこにはただ、作者や演者の〈身体の構え〉によって興された〈不在物のリアリティ〉がありありと存在するだけである。それは時に、実物以上に実物らしい、というパラドクスまでもはらんだ、過剰ともいえるリアリティを産出し得ることがある。むろんこれは芸術的体験としては当然のことであろう。

そしてこのように考えてくれば、なんらかの芸術様式について、それが「フィクションであるか否か」といった類の議論は、ここではあまり意味をなさないと思われる。

実際の経験や現実に存する対象物の特性を、何か別の媒体を介して表現したり、またその特性の構成を組み換えて表現することをフィクションと称し (たとえばアニメーションや小説など)、その一方で、写真やビデオ、模写のように、忠実に対象物の特性を写しとる作業の結果生じたものをノンフィクションと呼ぶ傾向は常識的であるかもしれない。しかしながら、「対象の特性をピックアップする」という運動の結果生じた作品であるという意味においては、そこにはあえて区別すべ

き“質的な”差異はないといえよう。

さて、こうした議論をすすめていくと、作者や演者が表現しようとする不在物と、視聴者がそこに見出すものとは一致しているのか、という問題が必然的に生じてくる。そして当然ながら、ここには本稿のもうひとつの主題である「〈不在物のリアリティ〉の他者への伝達」という大問題が絡んでくる。

先述したように、これは本稿のボリュームでは扱いあぐねる議論である。次号以降に展開していくことにしよう。

2-3. 対象の側における〈不在物のリアリティ〉

——電車とトンネル、大地と津波

これまででは、想起を行う際に現れる〈不在物のリアリティ〉という矛盾を孕んだ概念を、おもに主体の側、とりわけ身体サイドから検討してきた。本節においては、対象の側にやや視点を移しながら、この概念にしつこく付きまとう矛盾や困難を解きほぐしていきたい。

松島（1996, 2002）は、「知覚がいつ記憶へと変化していくのか」を問う中で、J. J. ギブソンの「すべては知覚である」というラジカルな発想を批判的に継承しながら、知覚と記憶のあいだには厳密な区分を設けることが出来ない可能性を示した。その一方で、知覚と記憶が重なるような中間領域の存在の可能性について検討を行っている。詳細は原著を参照していただきたいが、以下ではその議論をベースに、本稿の目的を達するためにそれを発展させていこう。

ここでもわれわれは、具体的な現象から出発することになる。

いま、模型電車が線路の上を走って長いトンネルへと入っていく。電車の先端がトンネルに入るところから完全にその姿を消すまで、その過程を持続的に見ている人物（a氏としよう）にとっては、電車が完全にトンネルに入った今現在の時点において、トンネルの中に電車が「ある」ことは分かりきっている。この当たり前の事実からスタートしよう。

このとき、彼にとって、実際に電車は見えていないけれども、電車がトンネルの背後に「ある」

ことが見えている、と言ってもよいだろうか。

この問題を考えるとき、つぎのことが重要になるだろう——このa氏にとって「電車がみえなくなった」ことと「トンネルだけが見えている」ことは、彼にとっては全く等価であり、全く同じ現象である。しかし、これは一連の過程を持続的に見続けている彼であるからこそいえることであって、電車がトンネルに完全に入り終えその姿を消してしまってから現場にやってきて「トンネルだけが見えている」人物（これをb氏とする）においては、それは「ただのトンネル」であって、「電車を隠したトンネル」ではないのである。

このシンプルな話は、本論において重要な意味を持つことになると思われる。

電車がトンネルに差しかかる当初から現場に居続けるa氏にとって、「トンネルのみが見えている」という今現在の事態は、電車を「『ない』」というかたちで見ている」と表現し直してもよいだろう。すなわち、彼にとって、不在物である電車は、文字通り「ありありとしたリアリティ」をもって、「ない、というかたちで、存在する」のである。

a氏とb氏は、同じ対象物＝“トンネル”を見ていながら、じつは、違うもの（a：電車の入ったトンネル、b：単なるトンネルのみ）を見ているのである。

こうした事態については、従来の伝統的な心理学用語では捉えきることができない。しかしながら、本稿においては、両者のあいだには、見るという身体行為における〈身体の構え〉の大きな差異がある、ということが出来るだろう。たとえば、電車がいつまでもトンネルから出てこなければ、a氏はトンネルをひよいと持ち上げて電車を救い出すことが出来るだろうが、b氏にはそれが出来ない、といったように。すなわちここには、「見ること」において必然的に伴う身体性の差異が潜在するのである。

なぜ、このような日常的事態が、本稿において重要になるのであろうか。より現実的な問題に即して述べてみよう。

先の東日本大震災においては、津波によって、数多くの家屋や人々が流された。

その現場に当初から居り、家屋や人々が流された過程を見続け、そこに生き残った“A氏”と、震災後に現場にやってきて、ほぼ更地になった平らな大地を見る“B氏”がいるとしよう。今、ふたりは同じ大地を見ている。視覚的には「同じ大地」が、両者の網膜に像を結んでいるとしても、A氏は、先のa氏と同様に、「そこには存在しないものを、ない、というかたちで」見ていることになるはずである。すなわち彼は、「ただの大地」ではなく、「家々と人々が『存在した』大地」を見ているのである。先のa氏と同様、震災のサバイバーであるA氏は、始めは「家と人々と大地」を見、その持続の延長線上に、今現在は「ただの大地」を見ている。この持続をすべて経験しているA氏にとっては、「間違いなく存在していた家と人々が見えなくなった」ことと、「大地だけが見えている」ことは、a氏同様に、〈等価〉なのである。すなわち、A氏にとっては、a氏がトンネルの背後に電車を“見た”ように、「家々」も「人々」も“見えている”。このような用語法が常識的に許されないのであれば、A氏においては、今現在の更地となった大地の上には家々と人々が「リアリティをもって」現れている、と表現してもよい。

ところでA氏に生じているこのような事態は、想起と呼ぶべきであろうか、あるいは知覚と呼ぶべきであろうか？ おそらくは想起と知覚が重複した領域、と呼ぶことが相応しいように思われる。それはわれわれが〈不在物のリアリティ〉と呼んできた事象のひとつの明確な在り方である。

あるいはまた、A氏にとって、震災当時から現在までの時間差によって、「想起」と呼ぶか「知覚」と呼ぶか、選択すべきであろうか。しかし、殆どの震災当事者がたびたび口にする「震災は、まだ過去になっていない」という言及に注目しておきたい。

先のa氏のケースにおいて、トンネルから、何等かの理由で電車が出てこなかった際、a氏は、3分経過しても、30分経過しても、「電車の入ったトンネル」を見ることを続けることは可能である。この時間経過は3時間であっても、3年でも、同じことである。時間の客観的な経過の長

さが、a氏のトンネルの見え方に質的な変化を与えることはない。

同様に、震災を経験したA氏にとっても、時間経過の長さは、「大地」の見え方に質的な変化を与えることはない。A氏はいつまでも「そこには“ない”が、“ないというかたちで存在する”」家々と人々を、リアリティをもって“見る”ことが出来るだろう。そして、この見方は、当然ながら、それに応じた〈身体の構え〉を伴うことになる。その独特の〈身体の構え〉は、震災後にその現場にやってきたB氏のそれとは大きく異なる。

※ ※ ※

ここに至って、やはりそろそろ紙幅が尽きてきたようである。次稿(Ⅲ)においては、「同じものを見ながら違うものを見ている」、A氏とB氏のあいだに生じる問題を詳しく検討していかなければならない。A氏がB氏に対して、その“現場”において何度も震災経験を語るができるとするなら、そこで、聴き手であるB氏の〈身体の構え〉がA氏のそれに近似していく可能性はどの程度現実性をもつものなのだろうか。そうした点を中心に具体的にみていくことにしたい。

そして、中途半端な問題提起に終わってしまった、ジェームズ=ランゲ説および「身体化された認知」(embodied cognition)の近年の研究動向の検討をそこに絡ませていくことにしよう。

こうした議論を経ることで、語り手と聴き手のあいだの〈身体の構え〉の近似が、両者間の〈不在物のリアリティ〉の近似を正当かつ具体的に導く可能性がつまびらかにされることを次稿に期待したい。しかしながら一方では、それが単なる疑似的な知覚の類似に過ぎないという可能性も排除はできていないのである。大きな問題がまだわれわれには残されている。(以下、次稿(Ⅲ)へ続く)

注

- (1) 本稿の一連の思考は、そもそも先達の高木(1996)の論考に触発されて開始されたものであるが、高木(1996)の発展的論文といえる高木

- (2006)・高木(2011)においては、こうした「不在へのアクセス」が主眼的に扱われているものの、高木(1996)で主題化されていた身構えの復活とそれに伴い出現する過去事象のリアリティの再興については、議論の再考がなされている。すなわち、本稿が展開する(した)ような「〈身体の構え〉の持続により、今は無き不在物が生々しいリアリティを獲得すること。さらに、それが(反復視聴により)聴き手に伝播・遷移する可能性を持つこと」、といった議論の方向性とはやや異なる展開をみせている。詳細は原著にあたって頂きたいが、高木(2006)・高木(2011)においては、不在をある種の「底知れなさ」(高木, 2011)を孕む「想像し難い、説明し難い」不在性として捉え返されている。筆者はこの点には同意するところもある(松島 2004, 2005, 2014)が、その一方で、本稿ではあくまでも〈不在物のリアリティ〉の理解可能性および第三者との共有可能性について、身体的な理解(松島, 2014)による「かつての現実性への近似」という方向性をもって議論を深めていきたいと考える。
- (2) しかしながら、身体を主題とする本稿では、「聴く」という語義を広く捉え、そこに「視聴」や「鑑賞」をも含めたい。
- (3) 歯痛に限らず、たとえば、「腰痛」においても同様のことがいえるだろう。ちなみに、よく知られるように、英語圏の文化においては腰痛に該当する表現は「背中の痛み: backache, あるいは背中下方の痛み: lower back pain」であり、われわれよりも漠然とした部位を指示している。
- (4) そばのように「のど越し」を重要視する食物においてはこの限りではない。しかし、上手いソバとそうでないソバを「のど越し」で味わい分けるためには、それなりの複雑で能動的な口内活動があるはずである。なお、「ものすごく不味い」類の飲食物についてもまたこの限りではなく、そこでは当該の味覚を外部へと排除するような能動的活動(吐き出す、唾を多く分泌させる、水で口をすすぐ、等)がなされるであろう。
- (5) エコロジカル・サイコロジー(Ecological Psychology)。我が国においては佐々木正人氏らが中心になって日本生態心理学会が組織され、認知科学やリハビリテーション学のみならず、哲学・言語学・倫理学や芸術学といった多分野に影響を与え、かつ、それらを巻き込みながら盛んに研究が行われている。
- (6) 人体型二足歩行ロボットにおいてこの動きをスムーズに行うことがいかに困難かは、この20年間の研究を概観しても明らかであろう。
- (7) むろん、「炊き込みご飯なんて何食べても同じ」という人物がいることは十分承知している。
- (8) 高木(2011)による、「地:現場, 図:かつての不在物」とし、想起活動において地を指向することによって、図が少しずつ明確になっていく、という議論についても参照されたい。(但、高木においては図はあくまでも〈不在〉であるため、その内実とは具体化・明瞭化されることはなく、そのようなかたちでは聴き手に伝達困難なものとされる。)
- (9) ちなみに彼はいわゆる「食通」ではないことに留意されたい。
- (10) 彼は、暑い時期にはもりそば、寒い時期にはかけそば、と決め、一年中、昼食にはそばを食していたという。彼によると、これは「夕食を旨くするため」であるといい、単純にみえるこうした反復にも、やはり未来への時間が孕まれていることは興味深い。
- (11) 先述の日本生態心理学会においてもこの領域をめぐっては多くの議論がなされている。その成果として、例えば「アート/表現する身体」(佐々木編, 2006)、「レイアウトの法則—アートとアフォーダンス」(佐々木, 2003)等がある。
- (12) 点描という語からモネを連想する向きもあろうが、モネは「点描」というより「筆触分割」に分類される。ただし、本論の文脈(対象を忠実にかたどらない筆致)という観点からは同列に論じてもよいだろう。
- (13) 彼が1980年代にアメリカ合衆国のTVショーに出た際の映像と思われる“The Tango Dancer”というタイトル(YOUTUBEにおいても公開されている以下のURLの映像、<https://www.youtube.com/watch?v=D8brJIS3VXk>)の0分58秒から1分00秒にかけての動作。

文献

- Gibson, J. J. (1950). The Perception of the Visual World, Houghton Mifflin. (東山篤規他訳、『視覚ワールドの知覚』。新曜社, 2011年。)
- Gibson, J. J. (1966). The senses considered as perceptual systems, Houghton Mifflin. (佐々木正人他訳『生態学的知覚システム—感性をとらえなおす』。東京大学出版会, 2011年。)

- Gibson, J. J. (1979). *The Ecological approach to visual perception*, Houghton Mifflin. (古崎敬他訳『生態学的視覚論－ヒトの知覚世界を探索』, サイエンス社, 1985年.)
- Jhering, H・Marceau, M (1956). *Die Weltkunst der Pantomime*. Aufbau-Verlag Berlin. (尾崎宏次訳『パントマイム芸術』, 未来社, 1971年.)
- 松島恵介 (1996). 「不在の知覚?」. 『現代思想』第25巻2号, 「特集・アフォーダンスの視座」, 青土社.
- 松島恵介 (2002). 『記憶の持続 自己の持続』, 金子書房.
- 松島恵介 (2004). 身体, 行為, 証言－「ショアー」における想起／忘却 (Ⅰ). 龍谷大学社会学部紀要第25号, 龍谷大学社会学部学会.
- 松島恵介 (2005). 身体, 行為, 証言－「ショアー」における想起／忘却 (Ⅱ). 龍谷大学社会学部紀要第26号, 龍谷大学社会学部学会.
- 松島恵介 (2014). 「〈記憶の伝承〉は可能か? (Ⅰ) ～想起する身体について」. 龍谷大学社会学部紀要, 第44号, 龍谷大学社会学部学会.
- 大森荘蔵 (1992). 『時間と自我』, 青土社.
- 佐々木正人 (2000). 『知覚は終わらない－アフォーダンスへの招待』, 青土社.
- 佐々木正人 (2003). 『レイアウトの法則－アートとアフォーダンス』, 春秋社.
- 佐々木正人 (2006) 編. 『アート／表現する身体』, 東京大学出版会.
- 高木光太郎 (1996). 身構えの回復, 佐々木正人編『想起のフィールド：現在のなかの過去』, 新曜社.
- 高木光太郎 (2006). 「記憶空間」試論, 『社会空間の人類学－マテリアリティ・主体・モダニティ』第二章, 世界思想社.
- 高木光太郎 (2011). 「回想とディスコミュニケーション」, 山本登志哉・高木光太郎 編『ディスコミュニケーションの心理学 ズレを生きる私たち』第6章, 東京大学出版会.
- 内田百閒 (1946). 『御馳走帖』, 榜葛刺屋書房, 1946年初版. (中公文庫版：1996年.)